

啓蒙朝鮮史略 一

2

17

003476-001-7

2-17

朝鮮史略

菅原 龍吉／編

(刊年不明)

ACC-2184



官原龍
編集 啓蒙朝鮮史畧 一

東泉園書額					
七冊	二號	一架	二函	屬	類

卷三

2

17

菅原龍吉編集

啓蒙朝鮮史畧

東京

千鍾房發兌

啓蒙朝鮮史畧卷之一

書籍類例

此書

書專ラ朝鮮國ノ古今ノ沿革。理亂ノ

事實ヲシテ一讀了然タラシメントラ要

ス故ニ首ヨリ尾ニ至ルマテ盡ク編年體

ヲ以テ記載シ毫モ私意ヲ挿ンテ綴文ヲ

用ヒス

一本書標スルニ啓蒙朝鮮史畧ヲ以スル所

啓蒙朝鮮史畧卷一

凡例

2
17

2
17

東亞新報

書籍部

圖書部

史略卷之一

凡例

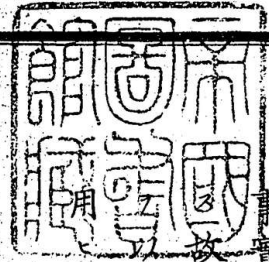
書專ラ朝鮮國ノ古今ノ沿革。理亂ノ

事實ヲシテ一讀了然タラシム。一ヲ要

故ニ首ヨリ尾ニ至ルマテ盡ク編年體

ヲ記載シ毫モ私意ヲ挿シテ綴文ヲ

ス



一本書標スルニ啓蒙朝鮮史略ヲ以スル所

啓蒙朝鮮史略卷一

凡例

以ハ本童蒙ニ便ニセシコト本旨トス故
ニ熟語ニハ真片假名ヲ加ヘテ之ヲ解シ
頗ル俚俗ニ涉ルモノ多シ看官宜シク之
ヲ察セヨ

一 國名地名并ニ郡縣山河都府名等ハ
ヲ右傍ニ施シテ之ヲ分チ即チ今ノ何州
郡ト注ス人名官名謚号等ハ
之ヲ畫シ繙閱ニ便ナラシム

一 君主ノ薨立邦國ノ興亡及ヒ其他緊要ノ
事蹟等ニハ我カ日本ノ年號ヲ注シ以テ
年代時世ヲ瞻顧スルノ階梯ト為ス

一 人名地名ニ係ハラス總テ疑團ニ屬シ判
然タラザルモノハ左方ニ——ヲ施シ暫
ク録シテ以テ異日ノ點檢ヲ俟ツ

一 此ノ著僅カニ二閱月ニシテ成ヲ告ケ未
タ全ク校正スルニ及ハズメ書肆既ニ剖

劄ニ附セシモノナレハ謬誤スル者少カ
 ラズ凡ソ卷中（ ）ヲ區畫スルモノ間
 レアリ是レ原書ニテハ素割注ナルカ倉
 卒ノ間筆者誤テ之ヲ本文ニ載ス看ル者
 請フ之ヲ記セヨ

編者誌

啓蒙朝鮮史略

目次

卷之一	始祖檀君ヨリ
卷之二	三韓ニ至ルヨリ
卷之三	新羅ノ亡ニ至ルヨリ
卷之四	高麗ノ恭孝王ニ至ルヨリ
卷之五	元宗順孝王ニ至ルヨリ
卷之六	高麗ノ忠烈王ヨリ
卷之七	辛禑ノ恭愍王ヨリ
	高麗ノ元王ヨリ

大尾

啓蒙朝鮮史略卷之一前編

三韓記第一

檀君

大日本國宮城縣仙臺菅原龍吉編輯

檀君姓ハ桓氏名ハ王儉朝鮮初ノ君長ナクシテ
只九種ノ夷族アリ時ニ神人桓因ノ子桓雄トイ
フ者アリ其ノ徒三千ヲ率テ太伯山平安道寧辺
香山神檀樹ノ下ニ降レリ人々ヲ神市ト謂フ世
ニ在リテ政ヲ理シ化ヲ施ス子ヲ生ミ号ノ檀君
ト曰フ唐ノ戊辰帝堯ノ二十ニ位ニ即キ始テ朝

鮮ト号ス平壤今ノ平壤府ニ都セリ後白嶽文化縣ニ在リ
 移ル非西岬ノ河伯ノ女ヲ娶テ子ヲ生ム名テ扶
 婁ト曰ヘリ丁巳ノ歳夏ノ禹元年禹南方ニ巡狩シテ
 諸侯ヲ塗山ニ會ス扶婁焉ニ朝セリ塹城壇ヲ海
 島中ニ築キ以テ天ヲ祭ル又三子ニ命ノ城ヲ築
 カシム府今俱ニ江華薨ス去壤江東縣ニ在リ葬ル後嗣
 箕子ヲ避テ都ヲ藏唐京ニ文化縣ニ在リ移ス世ヲ傳フ
 ル凡テ一千五百年

箕子

周ノ武王商ニ克ツキ商ノ臣箕子中國ノ人五千

ヲ率テ朝鮮ニ入ル武王因テ之ヲ封ス箕子乃チ
 平壤ニ都セリ是ヲ後朝鮮トナス箕子民ニ教ユ
 ルニ礼義及ヒ耕桑紉ノ術ヲ以テシ八條ノ禁
 ナ目詳ヲ設テ曰ク相ヒ殺ス者ハ當時ヲ以テ殺
 價ヒ相ヒ傷クモノハ穀ヲ以テ之ヲ償ハシメ
 盜竊スル者ハ没入シテ其家ノ奴トナシ女ハ婢
 トナサン自ラ贖ハント欲スル者ハ人コトニ五
 十萬ヲ收ムレハ免レテ民トナル得ルト雖
 氏人々皆ナ此等ノコトヲ為ス羞ヂ相ヒ嫁娶
 スルニ礼ヲ以テメ艶色ヲ售ル者ナシ是レヨリ

ノ後チ教化大ヒニ行ハレ民俗頻リニ敦厚ニ趣
キ盜賊ノ跡遂ニ絶ヘ每家皆十門戸ヲ鎖サスメ
眠リ飲食必ス遵豆ヲ用ユルニ至レリ其ノ子孫
ニ至リ稍ク驕虐ナルヲ以テ燕乃チ其ノ西ヲ攻
メ満潘汗ヲ界トナセリ是ヨリ朝鮮衰弱ニ瀕シ
四十代ノ孫否ニ至リ遂ニ秦ニ属シ四十一代ノ
孫箕準ニ至リ燕人衛満ノ為ニ誘逼セラレ海ニ
浮テ韓ノ地ニ奔ル衛満乃チ悉ク朝鮮ノ地ヲ有
テリ

衛満

燕人衛満ハ漢ノ高祖ノ時燕王盧綰ノ乱ニ因テ
亡命シ大同江ヲ渡テ朝鮮ニ来リ箕準ヲ逐ヒ王
儉城ノ平壤ニ據リ仍ホ朝鮮ト号ス孫衛右渠ニ
至リテ漢ノ詔ヲ奉セサルヲ以テ武帝公孫遂ヲ
遣シテ之ヲ滅シ此地ヲ分チテ四郡トナシ樂
浪平臨屯ノ東曉縣今玄菟ノ東沃沮城今真蕃
縣ト云ヘリ漢ノ昭帝ニ至テ之ヲ二府トナシ玄菟ヲ平
州都督府トナシ臨屯樂浪ヲ東府都督府ト為セ
リ

三韓

馬韓ハ今ノ全羅ノ地ナリ箕準衛滿ノ強迫ヲ避
 テ海ニ浮ヒ韓ノ地金馬郡ニ居リ今ノ益山韓王
 ト号ス其ノ民勇悍ニシテ常ニ穴居シ蚕桑ヲ知
 リ縣布ヲ作リ以テ活業ト為ス箕準國ヲ統スブル
 五十四後チ百濟王溫祚之ヲ并ス箕子國ヲ建シ
 ヲリ是ニ至ルマテ凡ソ一千餘年ナリ
 辰韓ハ今ノ慶州ナリ秦ノ亡人避テ韓ニ入ル韓
 東ノ疆ヲ割テ之ニ與ヘ常ニ馬韓人ヲ用ヒテ主
 トナス地五穀ニ宜ク俗蚕桑紡績ヲ事トシ牛馬
 ニ乘駕ス男女別アリ行者路ヲ讓リテ大ヒニ礼

風ヲ存セリ

弁韓弁ハ一作ルニ今ノ平壤ナリ國ヲ韓ノ地ニ立
 ツ其ノ始祖年代ヲ詳ニセス辰韓ニ属メ亦十二
 ケ國ヲ統轄セリ

三國

新羅ノ始祖赫居世立ツ我崇神天皇四十五年初
 メ高墟村長蘇伐公大ナル卵ヲ蘿井林ノ間ニ得
 タリ剖テ之ヲ見ルニ嬰兒アリ出ツ乃チ取テ之
 ヲ養フニ岐嶷ニメ夙ニ六部ヲ成ス朝鮮ノ遺民
 居ル者分テ六村トナ衆皆ナ之ヲ異トシ共ニ立
 ル或ハ六郡トイフ

テ、君ト為シ居西于ト号ス乃チ方言ニテ王ト
謂フ義ナリ辰韓ノ地ニ都シ因テ徐羅伐ト号シ
朴ヲ以テ姓ト為ス俗、甄ヲ以テ朴ト為ス割ク所
ト「閼英」初メ竜ア老嫗之ヲ養ヒ井ヲハル右脇ニヨリ女姓所
ク立テ妃ト為ス妃能ク内事ヲ輔相スルヲ以
テ人之ヲ二聖ト謂ヘリ王六郡ヲ巡撫シ農桑ヲ
勸督シ馬韓ノ喪ヲ伐ス民ヲシテ敬讓セシム樂
浪嘗テ来リ侵セシニ夜戸ノ扃、ザルヲ見テ其
ノ有道ニ服シ兵ヲ引テ退ク東沃沮称メ聖人ト
為ス沃沮ハ麗ノ東ニ在リ北ハ挹婁ニ連ナリ地南

リ使ヲ遣ハシ馬ヲ獻シ卞韓ヲ以テ来リ降ル
高句麗ノ始祖朱蒙立ッ我カ崇神天皇ノ六十一
羅ノ始祖是ヨリ先キ東扶餘王金蛙扶餘王ノ子ナ
ニ嗣大石メ山川ヲ祭ルニ御スル所ノ馬鯢ニナ
至リ出ツ金蛙ト云フ長スル形ナリ喜テ之ヲ養フ
名ヲ女柳花ヲ太白山ノ南優渤水府今ノ子トナ
伯ノ室中ニ幽ス日影ニ照レテ娠ミ一卵ヲ生メリ
蛙之ヲ割ント欲メ能ハス母之ヲ褻ミテ暖ナル
處ニ置キシニ男子アリ殻ヲ破リテ出ツ骨表英
偉ナリ七歳ニシテ自ラ弓矢ヲ作り發スルニ中

ラサルナシ名ケテ朱蒙ト云フ扶餘ノ俗善ク射
トナ蛙ノ七子忌テ之ヲ殺サント欲ス朱蒙乃チ
烏夷陝父摩離等ト行キテ淹流水ニ至ルニ梁
ン祝シテ曰ク我ハ天帝ノ子ニシテ河伯ノ外甥
ナリ今日亂ヲ避テ此ノ處ニ至ルニ追者將サニ
及ハントス奈何セント是ニ於テ魚鼈群集ノ橋
ヲ成シ遂ニ渡ルコトヲ得タリ追兵至リ尋テ渡
ラントスルニ橋既ニ解ケテ及フコト能ハス朱
蒙等毛屯谷ニ至リテ三賢ニ遇フ麻衣衲衣テ俱
ニ卒本ノ扶餘川今府成ニ至ル扶餘王男子ナシ朱

蒙ニ妻スニ女ヲ以シ沸流及ヒ温祚ヲ生ム既ニ
メ王薨ス朱蒙乃チ嗣立シ自ラ商卒ノ後ト称シ
國ヲ高句麗ト号ス因テ高ヲ姓トス時ニ沸流水
上ノ松環國ノ王國ヲ以テ来リ降ル乃チ封メ多
勿侯トナス高麗ノ語ニテ舊主ヲ又苻人國及ヒ
太白山ノ東南ニ在リ沃沮一名ハ置溝婁北ハ挹
里即チ今ノ東三省府北沃沮一名ハ接婁北ハ咸
山人ノ北東ニ在リ濱大シテ海多ク山陰ハ不咸
四尺矢ノハ枯毒石ヲ以テ鉄トテ滅ス
高句麗王ノ母柳花東扶餘ニ卒ス其ノ王金蛙太
后ノ礼ヲ以テ之ヲ葬リ神廟ヲ立ツ高句麗王

朱蒙薨ス東明王太子類立ッ都ヲ國內ニ移ス
即チ又尉那巖城ヲ築ク朱蒙扶餘ニ在テ礼氏ヲ
義ノ後ヲ誤テ乃チ生ル奇節アリ父九ヲ彈ク
嘗テ罵問セラル婦ノ盆ニ中ツテテ柱下ヲ以テ
遺ス所ノ劍ヲ得テ以テ卒ニ往ルヲ見ユ王ノ母
シテ符合セリ乃チ立テ之ヲ太子驗トスルニ果
新羅王甄公ヲ遣ハシテ馬韓ニ聘セシム馬韓王
之ヲ讓ム甄公對テ曰ク我國二聖肇テ興シヨリ
人事修マリ天時和ラキ倉庫充實シ人民相ヒ敬
讓シ辰韓下韓樂浪倭人皆ナ畏レ懷カザルハナ
シ然ルニ尚オ謙虛シテ下臣ヲ遣ハシ聘ヲ修ム

ルニ反テ之ヲ怒リ却カスハ何ゾヤト韓王益々
恚リ將サニ之ヲ殺サントス左右諫メ爭フヲ以
テ聽シ還ス甄公ハ本ト倭人ナリ初ノ甄ヲ以テ
海ヲ渡リ来ル故ニ名トナスナリ
百濟ノ始祖溫祚立ッ我カ垂仁天皇ノ十二年○
祖四年父高句麗王朱蒙東扶餘ニ在ルトキ娶ル所
ノ礼氏ノ女子類立テ太子ト為ル溫祚兄沸流
ト相ヒ容レサルヲ恐レテ南ニ行ク沸流ハ弥鄒
忽今仁溫祚ハ河南ノ尉礼城今縣授ニ都シ國
ヲ百濟ト号ス初メ鳥于等ノ十人行ニ從フヲ以

濟ト改ムテ百後チ南漢山ノ城ニ徙ル
 壞城ニ徙ル漢今扶蘇ヲ以テ氏トナス
 出ナリヲ以沸流其ノ都ノ水土鹹濕ニシテ久シク
 居ルヲ能ハガハルヲ以テ尉礼ニ到ル宮室ノ盛ナ
 ルヲ見テ慚憤シテ死ス
 スヲ患フ韓韜ハ不咸山ノ北ニ在リ北沃沮ト相
 善冠鈔ノ三國並ヒ族父乙音智識アルヲ以テ舉
 テ右輔ト為シ兵事ヲ委ス卒スルニ及テ解婁ヲ
 以テ之ニ代フ解婁神識淵與年七十ヲ過ギテ薨
 カナホ衰ヘス

百濟王ノ都ニ老嫗アリ化シテ男トナル
 百濟使ヲ馬韓ニ遣ハシテ都ヲ漢山ニ徙ス
 告ケ仍ホ疆域ヲ定ム北ハ湍河ニ至リ南ハ熊川
 フ限リ西ハ大海ヲ窮ノ東ハ走壤ヲ極ム
 百濟王東明王ノ廟及ヒ國母ノ廟ヲ立ッ
 當ラ自カ別ニ宗ヲナス東明ノ廟ヲ立レハ則テ
 ナリ祀ル配スルニ他國ノ母ヲ以テシ別ニ其ノ母
 百濟漢城ノ人家ニ馬アリ一牛日生ム一首ニシ
 テ二身アリ下民相ヒ語テ曰ク牛一首ニシテ二
 身ナルモノハ大王鄰國ヲ併スルノ應兆ナリト

百濟王大ニ喜ヒ竊カニ辰馬ヲ并吞スルノ志アリ

新羅王赫居世薨ス在位六十一年ナリ太子南解

立ッ我カ垂仁天皇ノ三十四年次々雄ト号フ或ハ慈

ノ稱敬長

新羅ニ昔脱解ト云者アリ身ノ長九尺風神秀逸

智識人ニ過ク博文強記兼テ地理ニ通ス王妻ス

ニ女ヲ以テス擢テ大輔ト為シ委スルニ軍國ノ大

事ヲ以テス多婆那國王女ヲ娶ル國女大卵ヲ生ミ

取テ至ル浦養ノ老姫擯中ニ置キ海ニ泛ベテ河珍ノ浦

取テ至ル浦養ノ老姫擯中ニ置キ海ニ泛ベテ河珍ノ浦

鳴ヒテ水上ヲ過ク因テ昔ヲ以テ姓トナ倭ノ人

新羅ノ遠郡ヲ侵ス此郡ヨリ屢々名ツクナ倭ノ人

高句麗王都ヲ尉那巖城ニ遷ス太子解明性剛復

強力ヲ恃テ怨ヲ鄰國ニ結ブ解明都ヲ黃龍ニ定

其ノ勁弓ヲ射解明ニ送ク解明折ル太子曰ク父ノ命逃

ル可カラスト乃チ礪厚津ニ往キ槍ヲ以テ地ニ

挿ミ馬ヲ走ラセテ槍ニ觸レ死ス時ニ年二十一

王恭高句麗ノ兵ヲ發シテ胡ヲ伐ツ王從フコト

ヲ欲セス恭嚴尤ヲ遣ハシテ之ヲ撃チ降シテ王

ヲ封シ下高句麗侯ト為ス

高句麗王類利薨ス琉璃明王ト號セリ太子無位
ヲ嗣キ乙豆智ヲ舉ケテ左輔官ト為ス
高句麗王北ノ方扶餘ヲ伐ツ北溟ノ人怪由道ナ
ル者征討ニ從ヒ劔ヲ拔キ大ニ叫ビ直チニ進シ
テ扶餘王帶素ヲ斬ル其ノ季弟ノ皆ナ金蛙自立シ
テ王ト為リ都ヲ曷思水ノ濱ニ移ス從弟國人ヲ
率ヰテ來リ降ル姓ヲ絡氏ト賜フ皆ナ給テ文アル
新羅王南解薨ス朴昔ノ二氏遺命メ年長スルハ
モノヲシテ位ヲ襲ハシム太子儒理立ッ我カ垂
漢ノ五十二年○尼師今ト号ス儒理位ヲ普脫解
薨シテニ

曰ク智人年長セリト茲ニ於テ儒理立ッ
尼師今ハ方サニ曲理ト云ヘル義ナリ
百濟ノ始祖溫祚薨ス太子多婁立ッ我カ垂仁天
武四年○漢建
新羅六部ヲ分ツテ二トナシ姓ヲ二部一トナシ
一ヲ鄭ニ賜フ二部ニ會蘇曲アリ王女毎年七月
裴薛ノ女子ヲ率ヒテ大邱庭ニ會シテ麻ヲ績ガシ
内ノ八月十五嘉節ニ至リ功ヲ校ベ負ルモノニ酒ヲ
置シム之ヲ嘉節トイフ會新羅官制ヲ改メ十
蘇曲ヲ置ク曰ク伊伐餐曰ク伊尺餐曰ク迎餐曰
七品ヲ置ク曰ク大阿餐皆ナ直骨ヲ授ク王族ハ阿
ク波珍餐曰ク大阿餐皆ナ直骨ヲ授ク王族ハ阿
餐一吉餐沙餐級伐餐大奈麻奈麻大舍舍知吉士

大鳥小鳥造位ナリ
高句麗王其ノ貪暴ナル
ヲ以テ沸流ノ部長仇都逸苟焚永ヲ廢シテ庶人
トナシ鄒勃素ヲ擧ゲテ之レニ代ラシム三人ノ
モノ堂下ニ詣リ罪ヲ謝ス勃素カ曰ク人孰レカ
過ナカラシ過ソテ能ク改レハ善焉ヨリ大ヒナ
ルナシト仇都等感シ愧テ復タ惡ヲナサズ
高句麗王ノ元妃王子好童ノ愛ヲ以テ嫡ヲ奪ハ
ンコヲ恐レ王ニ讒スルニ王子ノ無禮ヲ以テス
王ノ疑フ或人王子ニ自釋センコヲ勸ム王子
ノ曰ク我若シ之ヲ辨セハ是嫡母ノ惡ヲ顯ハシ

父ノ憂ヲ貽スナリト遂ニ劍ニ伏シテ死ス

百濟始テ稻ヲ種ユ

駕洛國即チ今ノ金ノ始祖金首露立ツ我カ番仁

十二年漢初メ九千ノ首長駕洛ニ君臣ノ位號

衆ヲ統轄シ金合ヲ龜峰ニ得タリ開キテ之ヲ

視レハ六ツノ金卵アリ皆テ化シテ男トナル奇

偉長大ナリ始テ生ルモノヲ推シテ主ト為ス

姓ハ金氏金卵ニ因餘ノ五人亦各々五伽倻ノ

主ト為ル曰ク阿羅伽倻曰ク大伽倻曰ク星伽倻

漢兵ヲ遣シテ樂浪ヲ伐テ其ノ地ヲ以テ郡縣ト

ナス於是薩水ヨリ以北漢ニ属ス

高句麗王無恤薨ス大武神王ト号ス王怪由ア拔

キ豆智ヲ舉ケ貪鄙ナルヲ以テ仇都ヲ斥ケ知能

アルヲ以テ勃素ヲ褒賞シ蓋馬ヲ征シ樂浪ヲ滅

シ扶餘奔竄シテ自ラ避ケ勾茶威ヲ畏レテ来リ

降ル然リト雖氏惜ラクハ内讒ヲ信シテ賢子好

童ヲ殺スヲ太子解憂幼ナルヲ以テ王ノ弟解

邑朱立ツ我カ垂仁天皇ノ七十年

高句麗王解邑朱薨ス閔中王ト号ス先王ノ太子

解憂立ツ我カ垂仁天皇ノ七十四年性頗ル暴戾不

仁ニシテ國事ヲ恤レズ坐スレハ必ス人ニ籍

リ卧セハ則チ之ヲ枕ニス人或ハ動揺スレハ輒

ハチ之ヲ殺シ諫マルモノハ之ヲ射ル百姓多ク

怨ミ衆庶心ヲ離ス杜魯之ヲ弑ス慕本王ト号ス

在位六年ナリ國人琉璃王ノ孫宮ヲ迎ヘテ之ヲ

立ツ我カ垂仁天皇ノ八十二年是ヲ太祖王トナス

新羅王儒理薨ス王繇寡孤獨ヲ存問シ疾病ノ者

ハ必ス藥ヲ賜フテ之ヲ賑フ隣國ノ人聞ヒテ歸

化スルモノ衆シ然レ氏父ニ從ツテ命ヲ乱リ卒

シテ之ヲ昔氏ニ傳フ謀ヲ後昆ニ貽スノ道ニ非

メ	ナ	間	部	初	新	分	瓠	ザ
テ	ス	キ	公	ノ	羅	理	公	ル
鶏	鷄	テ	ヲ	王	王	ス	ヲ	ナ
林	智	之	二	夜	關	州	以	リ
ト	ト	ヲ	掛	ハ	智	主	テ	在
為	シ	名	視	白	小	郡	大	十
シ	ツ	レ	白	タ	兒	主	輔	四
因	ク	ハ	鷄	之	ヲ	主	ト	年
テ	姓	小	ノ	ヲ	得	ト	為	昔
以	ハ	兒	樹	視	養	号	シ	脱
テ	金	ア	下	セ	ツ	ス	宗	解
國	氏	リ	二	シ	テ		戚	立
号	始	王	鳴	ム	子		朴	ツ
ト	林	喜	ク	ル	ト		氏	我
ナ	ヲ	ビ	ア	ニ	為		ヲ	蚕
ス	改	養	リ	小	ス		遣	天
		ツ	乃	ヲ	姓		シ	皇
		テ	チ	キ	ハ		テ	ノ
		子	積	金	金		州	十
		ト	ヲ	積	氏		郡	年

百濟王^{多婁薨ス} 在位四十 太子^{已婁立ツ}
 新羅^{脱解王薨ス} 在位二十 初メ王^{南解ノ塔} 塔
 ラ以テ當^{ニ立ツ}テ王タル可ラサルニ立テ王
 リ又金積ノ説ニ惑^ヒ重器ヲメ卒ニ金氏ニ歸セ
 シノシガ天下ヲ以テ儒理ニ傳ヘシハ甚ク良善
 ノヲニメ功以テ過ヲ償^フト謂ヘシ
 婆娑王立ツ 乃チ儒理我カ景行天皇ノ十 王節儉
 ニメ民ヲ愛シ農桑ヲ勸メ兵甲ヲ練^リ高齡ノ者
 ハ必ス穀ヲ賜フテ賑恤^シ又十人ヲ分遣シテ州
 郡ヲ庶察^シ職事ヲ勤メサルモノハ之ヲ罰黜セ

リ月城ヲ築キ移ニ之テ都ス在位三十三年ニメ
薨ス太子祗摩立ッ我カ景行天皇ノ初年四十
高句麗王穢貊ト興ニ漢ノ玄菟ヲ襲フ穢貊ハ本
地ニシテ南ハ辰韓ト界ヲ接シ北ハ高句麗ハ本
漢ノ武帝元朔五年大穢貊ノ君南閭叛ハ浪至
漢其ノ地ヲ以テ滄海郡ト名ス穢貊ハ即チ漢ノ
今府春川府ナリ即チ
高句麗王其ノ弟遂成ヲ以テ軍國ノ事ヲ統シム
九都地大ヒニ震フ王豹ノ虎ノ尾ヲ齧ムト夢ミ
タリ占者ノ曰ク虎ハ百獸ノ長ニメ豹ハ類ヲ同
トテ大王ヲシ後絶ナル者ナリ意フニ王ノ族類
中ニ善

ラ作セハ則チ禍
反テ福トナレリ

高句麗穆度妻ヲ以テ左輔トナシ高福章ヲ以テ
右輔トナシ興ニ遂成ガ政ニ參與セシム度妻遂
政ノ異心アルヲ察シ疾ト称シテ仕ヘズ
百濟王己婁薨ス在位五十一年ナリ太子蓋婁立
ッ
新羅ノ祗摩王薨ス在位二十三年ナリ儒理王ノ
子逸聖王立ッ我成務天皇ノ四年
高句麗王位ヲ弟遂成ニ傳フ高福章諫メテ曰ク
遂成ハ残忍ニメ不仁ナリ今日禪ヲ受ケナハ明

日ハ必ス大王ノ子孫ヲ害セント王聽カス遂
ニ遂成ヲ立ツ我カ成務大皇ノ十年時ニ年七十六
高麗王遂成右輔高福章ヲ殺ス福章刑ニ臨ンテ
歎メ曰ク今マ君不義ヲ以テ一忠臣ヲ殺ス吾レ
生キテ無道ノ君ニ仕ヘンヨリハ寧ロ死スルノ
速ナルニ如カサルナリト從容トメ刑ニ就ケリ
高句麗王遂成大祖王ノ元子莫根ヲ殺ス其ノ弟
莫德禍ノ及ハンヲ恐レ自ラ縊テ死ス
新羅王逸聖薨ス在位二十二年ナリ初メ王精ヲ
勵マシ治ヲ圖リ政事堂ヲ建テ堤防ヲ修メ田野

ヲ開キ又民ニ金銀珠玉ヲ用ユルヲ禁シ以テ奢
ニ趨ル道ヲ塞グリ子阿達羅王立ツ我カ成務天
年〇漢永新羅迎日縣ヲ置ク初メ東海ノ十四
興二年鳥ト曰ヒ妻ヲ細鳥ト曰フ迎鳥漂フテ日本
國小角ニ至リ主ト為ルソノ妻細鳥入迎鳥細鳥
ヲ以テ日月ノ精ニ至リ立テ是ニ至テナリ日縣
又竹嶺路ヲ開ク豊基縣
高句麗前王宮薨ス壽百十九歲臨明答夫其ノ君
遂成ヲ弒メ次大王ト号シ其ノ弟伯固ヲ立ツ伯
固乃チ臨明答夫ヲ以テ國相トナシ前王ノ太子
那安ヲ以テ讓國君ト為セリ初メ答夫ノ難ニ那
安奔竄シタリ

啓蒙韓魚史四卷

客蒙明祥之啓

夫

於界留評者左可慮皆ナ外成ヲ以テ國拓ヲ執
威福己レ自シ多ク不法ヲ行ヒテ國ハ國人執
可レ因テ皆テ王都ヲ攻ム王乃チヲ兵ヲ徵メ之ヲ左
討平高句麗處士乙巴素ヲ聘シテ國相ト為ス
性實剛毅ニメ智慮深淵ナリ鵬綠谷ニ隱シカ
是ニ至テ東ノ智慮深淵ナリ鵬綠谷ニ隱シカ
政教ヲ明シテ内賞外罰ヲ信ニス人國相ニ除セラレカ
民政安ニシテ外無事ナリ官報トナシテ
每歲三月ニ至リテ外輸シテ以テ定試トナシテ
新羅ノ伐休王薨ス在位十五年ナリ伐休王ノ次
子伊買ノ子奈解王立ツ我カ仲哀天皇ノ五
高句麗ノ故國川王男武薨ス在位十九年ナリ于
后遺命ヲ矯テ王ノ弟延優ヲ立ツ
秘初メ喪ヲ薨ス

ス夜竊カニ王ノ弟發岐カ第二往キ説テ曰ク王
後嗣ヲ責テ曰ク王ノ弟發岐カ第二往キ説テ曰ク王
且シテ又タ王ノ弟發岐カ第二往キ説テ曰ク王
細入レテ之ヲ明命ヲ嬌メテ之ヲ立ツ執先王男
テ後宮ニ入リ明命ヲ嬌メテ之ヲ立ツ執先王男
武ノ弟發岐師ヲ遼東ノ太守公孫度ニ請ヒ延優
ヲ討ス其ノ弟劇須王命ヲ受ケ兵ヲ率井テ之ヲ
禦ク發岐克クメ自殺ス
高句麗ノ王延優前王ノ妃于氏ヲ立テ后ト為ス
駕洛國ノ王首露卒ス壽百五十ハ歲ナリ
新羅ノ人勿稽子隱レテ師翫山ニ入ル是レヨ
子嘗テ太子千老ニ從行シ伽羅國ニ及テ功ヲ獲甚
リシカ録セラレ後ナ鍋火ノ戰ニ及テ功ヲ獲甚

タ多カ^リシカ^又録^セラ^レバ^{是ニ至テ遂ニ}
髮ヲ被^リ琴ヲ撫^ヘテ師^範山^ニ入^リ返^ラズ^ニ
高句麗ノ王子ノ郊^外ヲ立^テ太子トナス^{初メ}
ア^リ逸^シテ酒^捕村^ニ至^ル一^女有^リ之^ヲ執^シ生^ハ王^ノ
聞^テ之^ヲ異^トシ^テ微^行メ^至ル^一女^ニ幸^シ之^ヲ執^シ生^ハ王^ノ
郊^外ノ日^ヲ以^テ是^ニ至^リシ^カハ^名ヲ^改ム^テ
百濟ノ肖古王薨ス在位四十九年ナリ子ノ仇首
立^ツ我^カ神^功皇^后甲^午年
高句麗ノ王延優薨ス在位三十一年ナリ是ヲ山
上王ト為^ス太子優位居立^ツ我^カ神^皇后^ノ攝^政年
新羅ノ奈解王薨ス在位三十五年ナリ伐^休王ノ
太子塔助賁王立^ツ我^カ同^三十^五年^初ノ^名ハ^ハ
魏太和四年

百濟ノ仇首王薨ス在位二十一年ナリ肖古王ノ
弟古爾王立^ツ我^カ同^三十^三年
新羅ノ助賁王薨ス在位十八年ナリ弟沾解王立
我^カ同^四十^七年^考骨^正ヲ^追封^シテ^立神^葛文^王
ト^為ス^ナ新^羅文^王ト^追封^シテ^皆
魏州ノ刺史母丘儉ヲ遣^ハメ高句麗ノ九都城
ヲ屠^ル玉^遁レ^テ南^沃沮^ニ奔^ル魏^兵退^ク王^國ニ
還^リ都^ヲ平^壤ニ^移ス^初メ^王竹^嶺ニ^至リ^シニ^軍
ニ^密友^トイ^ハル^者ア^リ死^ス脱^走ス^ルヲ^敵ニ^東部^ノ人^ニ
力^ニ戰^セシ^カハ^王間^行マ^シテ^東部^ノ人^ニ
魏^軍猶^オシ^テ窮^テ追^リテ^詐リ^降テ^魏部^ノ人^ニ
云^ハル^者ア^リテ^詐リ^降テ^魏部^ノ人^ニ
十八

功ヲ食器中ニ藏シテ魏ノ將ヲ刺シ殺シテ俱ニ死
等トナセリ

高句麗ノ東川王優位居薨ス在位二十二年ナリ

太子然弗立リ我同四十八年東川王ノ薨スルヤ

百姓考妣ヲ喪スルカ如ク近臣自殺メ以テ殉セ

ント欲スルモノ有ルニ至ル葬ルニ及テ墓ニ至

リ自死スル者甚タ多シ

倭主葛耶右ヲメ新羅ニ聘セシム新羅王昔于老

ニ命メ之ヲ斥ケシム于老素解王ノ父ニメ嘗テ

于老戲レニ使者ニ謂テ曰ク歸テ汝ノ主ニ語

レ我カ國必ス汝ノ主ヲ以テ鹽奴トナシ王妃ヲ

以テ嬖婢トナサント倭ノ主之ヲ聞キ大ヒニ怒

リ將ヲ遣メ新羅ヲ伐ツ于老已カ謬舉ニ由リ寇

ヲ致スヲ以テ單騎ニメ倭ノ軍ニ至リ往日ノ罪

ヲ謝セシカ倭人聽サスメ之ヲ執ヘ焚キ殺レタ

リ其ノ後倭ノ使者新羅ニ至ルキ于老ノ妻夫ノ

讎ヲ復セシメテ圖リ王ニ請フテ私ニ倭ノ使ヲ

饗シ其ノ醉ヘルヲ窺ヒ人ヲメ執ヘテ之ヲ焚キ

殺サシム

高句麗ノ王其ノ夫人貫那ヲ殺ス是ヨリ先キ王

ノ觀ヲ專ラニセシテ是ヲ懼レ王ニ讒テス「貫那」ヲ懼レ及テ后ヲ王ニ護セリ是ニ於テ王怒ヲ貫那ヲ草叢ニ盛リテ西海ニ投ス

百濟官制ヲ改メ内臣佐平宣納ノ事内頭佐平藏庫
掌事官内法佐平禮儀ノ事衛士佐平宿衛ノ事兵
官佐平外兵馬ノ事掌一官朝廷佐平刑獄ノ事ヲ
置キ又夕達率二恩率三德率四扞率五柰率六將
德七施德八固德九李德十對德十一文督十三佐
軍十四振武十五等ノ官ヲ置ケリ

新羅ノ沾解王薨ス在位十五年ナリ味鄒王嗣テ
立ッ我同六十年○魏景元二年○王姓ハ金閼
有七世ノ孫ナリ助賁王女ヲ以テ之ニ妻ハ

ス沽解王覺ノ嗣ナシ
國人乃ナ王_ヒヲ立_フヲ
百濟犯賊ノ禁_ヲ立_ツ
徴_シ終身_ヲ
禁錮_{セリ}
凡ソ官人財ヲ受ケ及ヒ盜
竊スル者ハ三倍ニメ賊ヲ

新羅伊餐良夫ヲ以テ舒弗耶ト爲シ兼テ内外兵馬ノ事ヲ知セシム

高句麗ノ中川王然弗薨ス在位二十三年ナリ子ノ藥盧嗣テ立チ我カ應神天皇ノ元其ノ弟逸友勃素ヲ殺ス初ノニ人謀テ病アリト稱シ溫陽ハ王力士ニ命シキ湣樂度ナク言語不遜ナリシカテ之ヲ殺サシメタリ

王弟達賈ヲ遣メ之ヲ伐チ檀盧城ヲ拔キ首魁ヲ殺ス乃チ達賈ヲ封メ安國君ト為セリ

新羅ノ味鄒王薨ス在位二十三年ナリ儒禮王嗣

テ立ツ我カ應神天皇ノ十年味鄒王身節儉ヲ務メ

政事ヲ勵マシ晉太康五年存問シ疾苦ヲ勞恤シテ大

ヒニ人君ノ德アリ

百濟ノ古仝王薨ス我カ應神天皇ノ十年在位五十

五年ナリ子ノ責稽王嗣テ立ツ

高句麗ノ西川王藥盧薨ス在位二十三年ナリ太

子相夫嗣テ立ツ我カ應神天皇ノ廿三年其ノ叔父

安國君達賈社稷ニ大功アリテ資望大ヒニ高カ

リシガハ王之ヲ忌ミ又タ其弟咄固ヲ誣ニル

ルニ異心有ルヲ以シ并セテ之ヲ殺ス國人皆ナ

之ヲ冤シス

燕ノ慕容廆屢々高句麗ノ地ヲ侵ス國相倉助利

乃チ北部ノ大兄高奴子ヲ薦メテ新城ノ太守ト

為ス高奴子慕容廆ニシテ治績アリ威名頗ル振ヒ

シカハ是レヨリ廆復タ来リ侵サス

伊西故國今ノ清郡新羅ノ金城ヲ攻ム新羅之ヲ禦

キ克タス忽チ異兵アリ皆チ竹葉ヲ珥ミ新羅ノ

軍ヲ助テ賊ヲ撃チ大ニ之ヲ敗リ竟ニ泰ル所
ヲ知ラス後チ或ル人竹葉數萬味都王ノ陵前ニ
委積スルヲ見之ヲ奇トシ因テ竹長陵ト称シ
新羅王印觀署調ノ二人ニ爵ヲ賜フ初メ印觀
シ離署調縣ヲ以テ縣ヲ買ヒ將ニ還ラント忽
至リ天授ヲ璽ヲ以テ印觀取テ署調ニ飛印觀
持テ天授ヲ璽ヲ以テ印觀取テ署調ニ飛印觀
棄テ以テ署調ニ拒ンセバ署調人乃チ縣穀ヲ已
百濟王責稽貊兵フ為ニ害セラル在位十三年子
ノ汾西王嗣テ立ツ我力應神天皇ノ廿九年

新羅ノ儒礼王薨ス在位十五年ナリ助賁王嗣テ
立ツ我前同年
高句麗ノ國相倉牟利其ノ王相夫ヲ廢シテ王ノ
弟乙弗ヲ立ツ乙弗ハ相夫ノ弟ニメ啞國ノ子ナ
作ニ至リ傭
漢ノ樂浪ノ太子刺客ヲ遣シテ百濟ノ王汾西ヲ
殺ス汾西王ノ諸子皆ナ幼ナリシカハ國人仇首
王ノ子久ク民間ニ在リシモノヲ舉テ之ヲ立ツ
是ヲ比流王ト為ス慈仁ニメ人ヲ愛セリ
新羅ノ王基臨薨ス在位十三年ナリ訖解王嗣テ

立ッ王不^フ荷^カニレテ父ノ讎ヲ忘レ婚ヲ島夷ニ聽
ル終ニ侵辱ヲ受ケ昔氏ノ祀是ニ於テ絶タリ
高句麗ノ美川王乙弗薨ス在位三十三年太子斯
由立ッ我カ仁德天皇ノ十九年名ヲ劍ト改ム
燕王慕容皝高句麗ヲ攻メテ丸都城ヲ陷リ美川
王ノ墓ヲ發キ其ノ尸ヲ載セ並ニ王母王妃ヲ虜
ニメ歸ル後チ王朝貢臣ト称シ初テ王母及ヒ父
尸ヲ還スヲ得タリ
百濟ノ比流王薨ス在位四十一年ナリ汾西王ノ
子契王嗣テ立ッ我カ仁德天皇ノ三十年
二年〇晉ノ建元二年

百濟ノ契王薨ス在位三年ナリ比流王ノ子近肖
古王嗣テ立ッ我カ仁德天皇ノ三十年
新羅ノ訖解王薨ス在位四十七年ナリ奈勿王嗣
テ立ッ我カ仁德天皇ノ四十二年〇晉ノ永和十
年未^ナ仇^リ王ノ金氏ヲ立テ妃ト為ス味鄒王ノ弟
百濟王大舉メ高句麗ヲ侵ス高句麗ノ王拒戦シ
流矢ニ中ッテ薨ス在位四十一年ナリ是ヲ故ノ
國原王ト為ス太子丘夫嗣テ立ッ我カ仁德天皇
晉ノ咸安元年都ヲ漢山ニ移ス
秦王苻堅使ヲ遣メ浮屠順道及ヒ佛像佛經ヲ高

句麗ニ送ル佛教ノ行ハル、一此ニ始ル

百濟ノ近肖古王薨ス在位三十年太子近仇首嗣

テ立ツ我カ仁徳天皇ノ六十三年百濟開國ヨリ以來

未ク文字有ラズ近肖古王高興ヲ以テ博士ト為

ス是ニ於テ始テ史冊アリ

百濟ノ近仇首王薨ス在位十年子ノ枕流王嗣テ

立ツ我カ仁徳天皇ノ七十九年胡僧摩羅難陀晉ヨリ

至ル王迎ヘテ宮内ニ置キ之ヲ礼敬ス○始テ大

學ヲ立テ律令ヲ頒ツ

高句麗ノ小獸林王薨ス弟伊連王嗣テ立ツ我カ前同

年○晉
前同年

百濟ノ枕流王薨ス在位三年ナリ弟辰斯嗣テ立

ツ我カ仁徳天皇ノ七十九年關防ヲ設ク青木嶺ヨリ

北ハハ坤城ニ距リ西ハ海ニ至テ窮マレリ

高句麗ノ故ノ國壤王伊連薨ス在位九年太子談

徳嗣テ立ツ我カ同八十七年是ヲ廣開土王ト為

ス

百濟ノ王狗原ニ敗シテ行宮ニ薨ス在位八年ナ

リ阿辛王嗣テ立ツ其ノ舅眞武ヲ以テ左將ト為

シ委スルニ兵事ヲ以ス武チキ沉毅ニメ大略有リ

新羅ノ柰勿王薨ス在位四十七年ナリ嗣子幼ナ
リケレハ國人實聖ヲ立テ王ト為ス我カ履仲
年晉ノ元興元年〇實聖王末斯品ヲ以テ舒弗ト
為シ委スルニ軍國ノ大事ヲ以ス
百濟王阿華薨ス在位十四年ナリ太子腆支立ッ
我カ履仲天皇ノ六年時ニ太子倭國ニ質タリシカ
ハ仲弟訓解政ヲ攝メ太子ノ還ルヲ待チシニ季
弟礪禮訓解ヲ殺シ自立メ王ト為ル腆支倭ニ在
リ父王ノ訃ヲ聞キ倭ノ主ニ請フテ國ニ歸ル倭
ノ主兵ヲ以テ腆支ヲ護送シテ國界ニ至ルニ適

ク此ノ變ヲ聞キ海島ニ據ル國人礪禮ヲ殺ノ太
子ヲ迎ヘテ之ヲ立リ是ヲ腆支王ト為ス
新羅ノ王倭人營ヲ對馬島ニ築クト聞キ之ヲ襲
ハン一ヲ謀リシガ末斯ノ諫メニ因テ止ム
高句麗ノ王談德薨ス在位二十二年ナリ王嘗テ
令テ國中ニ下ノ佛ノ崇ビ福ヲ求メ國社ヲ建テ
宗廟ヲ修メタリ子ノ巨連立ツ我カ允恭天皇ノ
九年是ノ長壽王ト為ス
新羅ノ訥祇王柰勿王ノ實聖王ヲ弑シ自立シテ
麻立千ト号ス位ヲ取ルヲ表スルノ稱〇初ノ柰
勿王實聖ヲ以テ高句麗ニ質トナ

新羅ノ軟良州ノ千朴堤上倭ニ至リ屈セヌメ之
シタ之ヲ我々實ノ報セントシテハ訥王其子
訥祗王カ實ノ報セントシテハ訥王其子
ニ死ス初ノ倭王ト好ハ麗ニ及テリ
弟ヲ見ス初ノ倭王ト好ハ麗ニ及テリ
謀ヲ有ル見ス初ノ倭王ト好ハ麗ニ及テリ
説キ有ル見ス初ノ倭王ト好ハ麗ニ及テリ
請ヒキ有ル見ス初ノ倭王ト好ハ麗ニ及テリ
スホキ有ル見ス初ノ倭王ト好ハ麗ニ及テリ
テ欣上ヲ主縛シカニ道ニレテ福ヲ以テ
マテ欣上ヲ主縛シカニ道ニレテ福ヲ以テ
上ヲ主縛シカニ道ニレテ福ヲ以テ
焚殺シテ主縛シカニ道ニレテ福ヲ以テ
餐ヲ殺シテ主縛シカニ道ニレテ福ヲ以テ

王已ニ弟ヲ見ル上ノ妻瑪述嶺ニ上リ倭國ヲ
曲ミ悲痛ト為セリ
望ミ悲痛ト為セリ
百濟ノ腆支王薨ス在位十六年ナリ子ノ久爾辛
嗣ヲ立ツ年カ允恭天皇ノ九年ニ薨ス子ノ
毗有嗣ヲ立ツ年カ允恭天皇ノ九年ニ薨ス子ノ
子ノ餘慶嗣ク是ヲ蓋鹵王トナス
新羅民ニ牛車ノ法ヲ教ヘ王親ヲ老ヲ南堂ニ養
ヒ穀帛ヲ賜フテ差アリ
新羅ノ訥祗王薨ス在位四十二年ナリ子ノ慈悲
王嗣ヲ立ツ年カ雄略天皇ノ二年末斯欣ノ女ヲ納

レテ妃ト為ス
高句麗ノ王巨璉自ヲ將トメ百濟ヲ攻メ王餘慶
ヲ殺セリ初シメ僞道璉ヲ罪ト云テア子リ慕ニ應シク
ニ入ル王基ヲ好ム璉ノ見テハ即チ謂メ曰ク臣百濟
基ヲ入ル王基ヲ好ム璉ノ見テハ即チ謂メ曰ク臣百濟
大國ニシテ果シテ璉ノ見テハ即チ謂メ曰ク臣百濟
父王ノ骨ヲシメ城ヲ築キシメ又郭ヲ作シ官ヲ
璉乃チ逃レテ還ラシメ城ヲ築キシメ又郭ヲ作シ官ヲ
兵率チ逃レテ還ラシメ城ヲ築キシメ又郭ヲ作シ官ヲ
下ニテ死セリ子ノ文周立ツ我カ雄國ハ百濟ノ
都熊津ニ移ス公州ナ今ノ耽羅ノ國即チ今ノ百濟
濟ニ來テ方物ヲ貢ス初ノ羅人ハ海ノ中ニ在リノ
地ヨリ湧キ出ソ長ク良乙ト云ヒ次ク高乙耶ニ
イヒテ海ヲ演ニシテ一石ト云ヒ次ク高乙耶ニ
人アテ見ルニ女及ヒ五穀ヲ播キ種ヲアヒテ之
ヲ分テ三女ニ娶ル始ニ至レテ或ハ此ノ國ヲヒ
シガハ後日ニ富庶ニ至レテ或ハ此ノ國ヲヒ
稱シテ恥ヘリ
羅トイヘリ
百濟ノ兵官佐平解仇其ノ君文周ヲ弑メ太子三
斤ヲ立ツ時ニ年十三ナリ二年王眞老ニ命シテ
解仇ヲ殺サシム三年王薨ス東城王牟大嗣ヲ立
ツ我カ同廿二年王ハ文周王ノ弟昆支ノ子ニメ
膽力人ニ過キ射ヲ善クセリ臨流閣ヲ官東ニ起
ス高サ五丈ナリ又池ヲ穿テ園ヲ置キ多クノ珍

地ヨリ湧キ出ソ長ク良乙ト云ヒ次ク高乙耶ニ
イヒテ海ヲ演ニシテ一石ト云ヒ次ク高乙耶ニ
人アテ見ルニ女及ヒ五穀ヲ播キ種ヲアヒテ之
ヲ分テ三女ニ娶ル始ニ至レテ或ハ此ノ國ヲヒ
シガハ後日ニ富庶ニ至レテ或ハ此ノ國ヲヒ
稱シテ恥ヘリ
羅トイヘリ
百濟ノ兵官佐平解仇其ノ君文周ヲ弑メ太子三
斤ヲ立ツ時ニ年十三ナリ二年王眞老ニ命シテ
解仇ヲ殺サシム三年王薨ス東城王牟大嗣ヲ立
ツ我カ同廿二年王ハ文周王ノ弟昆支ノ子ニメ
膽力人ニ過キ射ヲ善クセリ臨流閣ヲ官東ニ起
ス高サ五丈ナリ又池ヲ穿テ園ヲ置キ多クノ珍

禽奇獸ヲ養フ諫臣抗疏スレバ報セス復タ諫ム
ル者アラニトテ恐レ宮門ヲ鎖メ之ヲ拒メリ
新羅ニ百結先生トイヘル人アリ家極メテ貧ナ
リ常ニ百結ヲ纏フ時人因テ号トナス榮啓期ノ
人ト為リヲ慕ヒ一身琴ヲ離サス凡ソ喜怒哀樂
ノ事必ス琴ニ和メ之ヲ發ス適マ歲暮ニ會シ鄰
里皆ナ粟ヲ舂ク其ノ妻杵聲ヲ聞キ悽然トメ曰
ク人皆ナ粟ノ舂ク可キノリ我獨リ無シ何ヲ以
カ歲ヲ卒ヘント先生天ヲ仰テ歎メ曰ク死生命
アリ富貴天ニアリ其ノ来ルヤ拒ク可ラス其ノ

往クヤ追フ可ラス汝ナ何ソ之ヲ傷マンヤト乃
チ琴ヲ彈メ杵聲ヲナシ之ヲ慰メケレハ世傳テ
碓樂ト為セリ

新羅ノ慈悲王薨ス在位二十三年ナリ子ノ昭智
王嗣テ立ツ九年始テ郡驛市肆ヲ置ク十年王天
泉亭ニ幸ス鳥アリ書ヲ含ンテ飛ヒ来ル王書ヲ
得テ之ヲ見ルニ題メ曰ク聞クハ二人死ス開
カスニハ一人死セント日官奏メ曰ク所謂ハ一
人ハ君ナリト王乃チ開テ之ヲ視ルニ書メ琴匣
ヲ射コトイヘリ王宮ニ入リ琴匣ヲ射タリニ

果人アリ出ツ乃チ内殿ノ焚修僧ニメ是ヨリ
 先キ王妃ノ竊カニ引テ通スルモノナリ乃チ王
 妃ヲ并セテ皆ナ之ヲ誅ス日ニヨリ國俗毎歲是ノ
 祭ル又龍馬猪鼠ノ異ヲ設ケル百事以テ禁シ之ノ
 亥子ノ日ニ於テ祭ヲ異ケル百事以テ禁シ之ノ
 トイ
 高句麗ノ長壽王薨ス在位七十五年ナリ太孫羅
 雲嗣テ立ツ年我々仁賢永明九年是ヲ文咨王ト為
 ス
 新羅ノ王捺已郡ノ女ヲ納ル初メ王捺已郡ニ
 碧花ノ獻ス王納レバ其ノ歸リニ至ガ後チ追テ幸
 ル

光姫ノ曰ニ遇フ人問テ曰ク王國人我ヲ評スル
 姫猶リ之ヲ疑ス聞ク大王波路ノ女ナリ幸ニ
 妾服今ヲ行ト夫自レ龍魚服ヲ爲メ源者ニ制セ
 ノ如シ王若シ聖人ヲ重ハセ誰カ身ヲ輕ンル者
 アレ潜ニヤ其ノ女ヲ匿メ宮中ニ見レタリ是
 忍レ王薨ス在位十二年ニメ嗣ナシ再從弟智大
 年冬王薨ス在位十二年ニメ嗣ナシ再從弟智大
 路立ツ年我々武烈天皇二年ニメ四年始テ國號ヲ定ム
 新羅王ト稱ス此ヨリ前キ或ハ新羅ト稱シ或ハ
 四新王ト稱ス意ニシテ羅ハ新羅ト稱シ或ハ
 殉葬ナル男ノ各意ナリ人ヲ以テ王親ヲ州郡縣
 ヲ定メ金異夫ヲ以テ阿琴羅州ノ軍主トシテ
 ヲ定メ金異夫ヲ以テ阿琴羅州ノ軍主トシテ

山國ニシテ鬱陵ト名ツケリ海島ヲ伐テ之ヲ降ス在
 位十五年ニメ薨ス智證ト謚ス新羅ノ始法元子
 原宗立ツ我カ繼体天皇ノ三是ヲ法興王トナス
 百濟ノ苟加其ノ君牟大ヲ弑ス子ノ餘隆嗣テ立
 ヲ我カ同六年〇梁是ヲ武寧王ト為ス苟加ヲ討
 メ之ヲ誅ス
 高句麗ノ文咨王薨ス在位二十九年ナリ太子興
 安王嗣テ立ツ我カ繼体天皇ノ十三是ヲ安藏王
 トナス在位十三年ニシテ薨ス第室延嗣テ立ツ
 新羅律令ヲ頒テ始テ百官公服ヲ制セリ

新羅高句麗百濟ノ三國並ニ使ヲ遣メ梁ニ朝ス
 新羅初メテ佛法ヲ行フ初メ訥祇王ノ時ニ沙門
 墨胡子ト云ヘルモアリ高句麗ヨリ一善郡ノ今
 善山府ニ至ルニ郡人毛礼トイヘル人窟室ヲ作
 テ之ニ居ル昭智王ノ時ニ至テ僧阿道ト云ヘル
 者アリ其ノ徒ト與ニ亦タ毛礼ノ家ニ至ル是ヨ
 リ往々佛法ヲ信スル者アリ是ニ至テ王佛教ヲ
 興サントシケルニ羣臣皆ナ諫テ曰ク僧徒ノ議
 論ハ詭譎百端ナリ若シ之ニ從ハ後チ必ス悔
 ル有ラント近臣異次頓獨リ曰ク佛法ハ淵奧

ナリ信セサル可ラバト王以テ異言トナシ捕ヘ
テ吏ニ下ス異次頓刑ニ臨ミ謂テ曰ク佛若シ神
アラハ吾々死必ス異アラント斬ルニ及テ血断
處ヨリ進リ出ツ其ノ色白キ乳ノ如シ衆人之
ヲ怪ミ復タ佛法ヲ毀ル者無シ新羅哲夫ヲ
以テ上大等ト為シ國事ヲ總知セシム
百濟都ヲ泗泚即チ今ノ扶餘縣ナリ移シ國ヲ南扶餘ト
号ス駕洛國ノ王金仇衡新羅ニ降ル駕洛亡
グ始祖ヨリ此ニ至ルマテ凡ソ十王ニメ總テ五
百二十年ナリ

新羅ノ法興王薨ス在位二十七年ナリ王弟テ年
号ヲ建元トイヘリ國初ヨリ中國ノ年号ヲ
朝分裂セテ外官挈家ノ法ヲ立ツ真興王父麥宗立
シ故ナリ欽明天皇ノ元年〇梁ノ大同六年〇異斯
ツ我興ハ法興ノ弟ニメ初ノ名ハ立宗子〇異斯
夫ヲ拜シテ兵部令ト為シ内外兵馬ノ事ヲ掌ラ
シメ又童男ノ容儀端正ナル者ヲ撰ヒ風月主ト
号シ善士ヲ求テ徒ト為サシメ以テ孝悌忠信ヲ
勵マセリ

高句麗ノ王宝延薨ス在位十五年ナリ是ヲ安原
王トナス太子立成嗣テ立ッ太子生レナカラニ

メ聰慧ニ雄偉人ニ過ギタリ在位十五年ニメ薨
ス太子陽城嗣テ立ツ年我カ欽明天皇二十年是ヲ
平原王ト為ス

新羅ノ金居漆夫百濟ノ兵ト與ニ高句麗ヲ伐テ
十郡ヲ取リ僧惠亮ヲ以ヒテ來ル新羅ノ王亮ヲ
以テ僧統ト為シ始テ百座講會及ヒ八關ノ法ヲ
置ク初漆夫高句麗ノ國ノ虛實ヲ探ラノ處ニ詣リ
ノ曰ク汝ノ容貌ハ常ニ實ヲ探ラノ處ニ詣リ
ケルニ速カニ容貌ハ常ニ實ヲ探ラノ處ニ詣リ
帥ト為ラシメ我ニ害ヲ可シト漆夫乃チ還ラシメ
之ヲ誓フテ來ルニ至テ道ヲ左ト漆夫乃チ還ラシメ
見ヘテ遂ニ與ニ新羅ニ來レリ

百濟梁ニ侯景ノ乱有リシヲ知ラズ使ヲ遣ノ
梁ニ如キ朝貢セシム使者梁ニ至リ宮闕ノ殘毀
スルヲ見テ端門外ニ号泣ス見ル者皆ナ涙ヲ流
セリ○伽耶樂師于勤國ノ將ニ乱レントスルヲ
前見シ樂器ヲ剪ヘテ新羅ニ入ル王乃チ法知階
古萬德等ニ命シテ樂ヲ習ハシム伽耶王妻悉十
シテ勤ニ命シテ曲ヲ造テコレヲ奏セシム伽耶
ガ麗ノ人ヘテ初メ鼓ヲ奏セシム伽耶王妻悉十
リ舞ル其ノ制ヲ改メテコレヲ奏セシム伽耶王
人アリテ地理ニ入ルテ命得テ亦タス
カ其ノ術ヲ貴ニ傳ハシメ金ニ傳ハシメ地理ニ
其ノ術ヲ貴ニ傳ハシメ金ニ傳ハシメ地理ニ

王琴道ノ地ヘンヲ延レ伊餐允興ヲ以テ南原
ノ守トナシ其ノ術ヲ傳ヘシム允興乃チ長清ヲ
遺ス長清地理山ノ中ニ詣リ之ヲ學ヒ其ノ子松
ル所ノ飄風等ノ三曲ヲ傳ヘ受ケ之ヲ其ノ子克
宗ニ傳ヘタリ克宗ノ製スル
所ノ音曲ニ平調羽調アリ
百濟ノ王明禰兵ヲ帥ヒテ新羅ヲ侵ス軍士金武
功之ヲ擊チ殺ス謚シテ聖ト曰フ子ノ昌嗣ヲ立
ツ我カ欽明天皇ノ十五年 在位四十年ナリ謚シテ
威德ト曰フ子ノ季明嗣ヲ立ツ二年ニ薨ス是
ヲ惠王トナス子ノ宣嗣ヲ立ツ二年ニ薨ス是
ヲ法王ト為ス博士李文眞ニ命ノ始テ國史ヲ修
ム子ノ璋立ツ風儀英偉ニ志氣豪雄ナリ是ヲ

武王トナス

新羅ノ王伊餐異斯夫ノ請ニ從ヒ大伊餐金君漆
夫等ニ命メ文士ヲ集メ國史ヲ修ム○新羅ノ王
伊餐異斯夫ニ命メ大伽倻ヲ討ス即チ今ノ高麗
副斯多舍先ツ梅檀門ニ入り白旗ヲ立ツ異斯夫
乃チ兵ヲ引テ之ニ臨ミ遂ニ大伽倻ヲ滅ス時ニ
年十六王賞スルニ良田及ヒ虜ニスル所ノ二百
口ヲ以ス斯多舍其ノ田ヲ分テ戰士ニ與ヘ生口
ヲ放ルメ良人ト為セリ初メ斯多舍武官郎ト約
メ伽倻ノ交リヲ為セシカ武官死スルニ及テ讎

哭シテ禁スル克ハス七日ニメ亦卒ス
新羅ノ烈婦際厚卒ニ白雲ニ歸グ
同女ノ住ニ一時ニ男ノ家ヲ生メリ
雲年十五ニシテメセリ厚相ノ父メ
嫁ニシテハシ厚既カニサメ夫ニテ
生ニシテハシ厚既カニサメ夫ニテ
君ノ請フ之ヲ行ケルハ遂ニハシ
谷ノ間ニシテ厚ノ徒者金ニ聞
之ヲ殺シテ厚ノ徒者金ニ聞
人ヲ賜フテ厚ノ徒者金ニ聞
爵ヲ賜フテ厚ノ徒者金ニ聞
新羅ノ王新宮令テ皇龍寺ト為シ
新羅ノ王新宮令テ皇龍寺ト為シ
フ鑄ル令テ皇龍寺ト為シ

ヘルモアリ老松ノ壁ニ畫シメ鳥雀アリ往
カハ僧ノ鳥雀復タ來ラス補テ畫シメ鳥雀アリ往
ヒケルニ鳥雀復タ來ラス補テ畫シメ鳥雀アリ往
新羅源花廢メ花郎ヲ置ク初メ簡美ノ女二人
為ル一南毛トイヒ一置ク初メ簡美ノ女二人
百餘人聚メ之ヲ殺シ置ク初メ簡美ノ女二人
醉ヘシニ更ニ俊眞子ニ誅ニ伏セリ
源花郎更ニ俊眞子ニ誅ニ伏セリ
花郎更ニ俊眞子ニ誅ニ伏セリ
花郎更ニ俊眞子ニ誅ニ伏セリ
ル乃相樂ニテ邪用ヲ見テ之ヲ歌
新羅ノ真興王薨ス在位三十七年改元スル者一
ツ鴻濟ト曰フ王在位ノ末年ニ及テ
法雲ト号ス妃亦タ尼トナル子ノ金輪嗣テ立ツ

我カ敏達天皇ノ五、伊餐金居漆夫ヲ以テ上大等
年陳ノ大建八年、ト為シ委スルニ軍國ノ事ヲ以テス四年ニ薨
ス、眞智ト謚ス太子銅輪ノ子伯淨嗣テ立ツ是ヲ
眞平王ト為ス王生レテ奇相アリ身体魁梧ニメ
志尚沉毅、世事ニ練達ス○新羅ノ兵部令金后稷
ハ智證王ノ曾孫ナリ王敗獵ヲ好ム后稷屢ク切
諫スレヒ聽カス將ニ死セントスル其ノ子ニ
謂テ曰ク吾レ生テ君ノ惡ヲ匡ス一能ハザリシ
ガ吾レ死スルノ後チ尚ホ君ヲ悟ラサンヲ思
フ吾レ死セハ汝須ク吾カ尸ヲ王ノ遊敗路上ノ

側ニ瘞メヨト其ノ子父ノ言ニ從フ一日王出テ
、敗スルニ中路ニ聲アル如シ曰ク王公ル一母
レト王愕然トメ顧ミ之フ問フニ從者ノ曰ク后
稷ノ墓ヨリ至レリト乃チ后稷カ死ニ臨ミレキ
ノ言ヲ陳述ス王潛然トメ涕ヲ垂レテ曰ク夫子
生テ忠諫シ死シテ忘レズ其ノ我ヲ愛スル一深
シト是ヨリ復タ終身敗リセス
新羅始テ船府署各二員ヲ置キ又タ礼部令二
位ヲ兵部令一員ヲ調府掌一員ハ車乘ヲ掌ルヲ置ク
高句麗ノ平原王薨ス在位二十三年ナリ太子元

嗣テ立ツ我カ崇峻天皇十三年是ヲ嬰陽王ト為ス
新羅ノ國西部ニ秋大水アリ人戸三萬三百六十

高句麗新羅ヲ伐テ克クス其ノ將溫達此ノ役ニ
死ス溫達容貌龍鍾ニ其ノ家甚ク貧シカ
女アリハ帝ハ常ニ好ム温王戲レ之ニ養ヘル平原王ニ少
スル氏ニ嫁セシ温達ニ嫁レセシ温王長スル及テ將
ト王怒テ曰ク汝ノ適所ニ任カサシメ復タテ開
セズ温達乃チ官門ヲ出テ直ニ温達ノ家ニ至ケル
ニ温達コサレヲ見テ語ケテ温達ノ所ニ勸メテ獵
テハ會ニ出テ樂ニ獵リテ温達ヲ養フ
フテ養ハレム會ニ出テ樂ニ獵リテ温達ヲ養フ
人ノ前キニ在リケレハ王其ノ事ニ堪ユルヲ常ニ養フ

知リ礼ヲ備テ之ヲ迎ヘテ是ニ至テ新羅ヲ伐
且中テ戰ヒ流矢ノ為ニ大世トイフ人有リ少キ所ヨリ常ニ方外
新羅ニ志アリ嘗テ曰ク此ノ如キ山谷ノ間ニ居ラハ
誠ニ池魚籠鳥ニ異ナルヲナシ吾レ將サニ遠ク
吳越ニ至リ良師ニ就テ道ヲ訪ント遂ニソノ友
人仇漆ト與ニ南海ヨリ舟ニ乗リテ去ル後チ終
ハル所ヲ知ラス
百濟解離ヲメ新羅ノ四城ヲ攻シム小監貴山等
項コレニ死ス轉メマク假岑城ヲ攻メシニ縣令

讚德コレニ死ス後チ讚德ノ子金城墮主奚論又
少百濟ノ兵ト椒岑城ニ戰ツテ死ハ
新羅使ヲ遣シテ隋大業八年ニ如キ高句麗ヲ討スル
援兵ヲ請フ隋主煬帝之ヲ許シ親親ヲ六師ヲ御シ
テ進テ遼東ニ至ルニ麗ノ兵水ヲ阻テ拒守ス
隋主宇文暹ニ命ノ浮橋ヲ造ラン河ヲ渡テ之
ヲ擊ツ麗ノ兵大ニ敗ル左翊衛將米護兒海ニ航
ンテ先ツ涇水ニ至リ麗ノ軍ニ遇フ因テ之ヲ擊
チ破リ勝ニ乗レテ城下一至ルニ伏兵ニ陷ツテ
大ニ敗ル大將軍宇文述于仲文等諸將ト九道ヲ

分テ進ミ鴨綠江ノ西ニ會ス高句麗ノ大臣乙支
文德營ニ詣リ詐ツテ降り備サニ軍ノ虛實ヲ探
ツテ還ル述等軍ヲ進メテ平壤ニ向フ未ク城ニ
達セザル一三十里官軍皆テ疲羸シテ聞志ナク
且ツ城絶險ニメ猝カニ拔ク可ラサルヲ度リ且
ツ戰ヒ且ツ退ヒテ薩水ニ至ル隋軍河ヲ濟ル
半ニメ麗ノ兵後ヨリ其ノ後備ヲ襲ヒシニ八軍
俱ニ潰ユ獨リ衛文昇ノ軍全キヲ得タリ隋主
大ニ怒リ述等ヲ鎖繫メ引キ還ル乙支文德資質
沉勇ニメ智略アリ兼テ善ク文ニ属ス

隋ノ大業九年、隋主復タ高句麗ヲ攻メ遼東城ヲ
圍ム。二十餘日ナリシガ拔ケス會マ楊玄感ノ
反書至ル。隋主大ニ驚キ軍ヲ引テ還ル。後チ十年
隋主マタ高句麗ヲ伐タント欲シ涿郡ニ幸シ親
ラ我衣ヲ御シテ懷遠鎮ニ次ス。高句麗懼レテ降
ヲ乞ヒ因テ解新政ヲ送ル。政ハ素ト玄感ト友ト
玄感ノ反スルヲ聞キ自フ安シ善キモノナリシカ
ゼス。シテ来リ奔ルモノナリ。隋主大ニ悦ビ乃
チ師ヲ班ヘス。新羅大ニ饑ニ沙梁宮ノ諸ノ
舍人倉穀ヲ盗ンテ之ヲ分ツ。劔君トイヘル者ア
リ獨リ受ケズメ曰ク苟モ義ニ非ザンハ千金ヲ

掌上ニ置クト雖ヒ豈ニ心ヲ動ス可ンヤト退テ
近郎即チ花ニ詣リシニ諸ノ舍人言ノ漏レント
ヲ恐レ劔君ヲ殺サン。ト謀リ乃チ劔君ヲ召ス。
劔君往カントレケルニ近郎止ノテ曰ク胡ゾ諸
ノ舍人ノ罪ヲ有司ニ白セザルヤ。劔君カ曰ク我
レ死ヲ恐レテ人ノ陰事ヲ抵ルハ忍ビザルトコ
ロナリ。近郎曰ク盍ゾ逃レザルヤ。劔君カ曰ク彼
レハ曲ニメ我ハ直ナリ。然ルニ反ツテ自ラ逃ル
ハ丈夫ニ非スト。遂ニ往テ毒殺セラレ
高句麗ノ嬰陽王覺ス在位二十九年ナリ異母弟

建武嗣テ五ツ年○唐ノ武德元年 是ヲ營留王ト為ス

新羅ノ薛爾頭海泊ニ隨テ唐ニ入ル爾頭嘗テ曰
フ用ニハ滑部ヲ論シテ當否ヲ問ハス其
ノ族ニ非サレハ鴻才傑功アリト雖氏自ラ振フ
ノ能ハス我レ額ハ功ハ西ノカタ中ニ至テ終ニ
略ラ奮テ非常ノ功ヲ立テント是ニ至テ終ニ
唐ニ其ノ後チ唐ノ太宗高句麗ヲ伐ナシキ爾頭
コレニ從ヒ深ク入り疾ク闘フテ死ス帝泣然ト
メ涕ヲ流シ御衣ヲ脱シテ其ノ尸ヲ覆ヒ大將軍
ヲ贈ル
新羅ノ王舒玄等ヲ遣ハメ高句麗ノ娘臂城即チ今ノ

清州ヲ攻ム麗ノ兵羅ノ兵ヲ逆撃シテ利アラ
ナリ舒玄ノ子慶信時ニ中幢幢主タリ父ニ謂テ曰ク
慶信平生忠信ヲ以テ自ラ期ス今マ戰ニ臨ム勇
ナラサル可ラスト乃チ馬ニ跨リ陣ヲ突キ敵將
ヲ斬リ首ノ提テ來レリ諸軍因テ奮撃シ城遂ニ
陷ル舒玄ハ首露王ノ後裔ナリ嘗テ密カニ肅記
守トナシ時ニ萬明ヲ通シテ力後チ萬努ノ肅記
屋父ト許サス萬明ヲ別室ニ囚ヘシカト忽チ
於テ適レ出テ舒玄ニ守者ナリ驚カレハ萬明ノ
一童子金甲ヲ衣テ雲ニ降ルト夢ミ亦タ
慶信ナリ背ニ七星文アリ十月ニシテ舒玄名
命セ

兒ノヲ得タルハ謂テ曰ク庚辰ノ夜吉夢アリテ此ノ
相ヒ以テ名トナシハ礼ニ非ス今マ庚トモテ日ノ
タリ名似ク辰トハ信ハ是レ音相ヒ近シ且ツ古人「度」字形
タリ見テ然ク長シハ是レ「齊」名ナリ國疆ヲ侵執スル石
窟ニ入テ秘訣ヲ授ク又「寶」ノ光ハ「握」アリテ垂レテ地ニ下
リ天ニ告タルニ夜、虛角ノ光ハ「握」アリテ垂レテ地ニ下
動揺セリ
新羅ノ上舍人「實弓」トイフモノ、剛直ニメ下舍人
珍堤ノ為ニ讒セラレ冷林ニ謫セラレタリ或謂
テ曰ク何ソ自ラ辨セサル「實弓」カ曰ク昔「屈原」
ハ孤立メ擯斥セラレ「李斯」ハ忠ヲ盡クメ族ヲ夷

セラル倭臣主ヲ惑ハシ忠士、誣ヲ被ルハ古今ノ
常ナリ何ソ怪ムニ足ランヤ遂ニ辨セスメ往ケ

リ

新羅ノ眞平王薨ス在位五十四年ニシテ嗣ナシ
國人、王ノ女「德曼」ヲ立ツ唐ノ太宗亦ク使ヲ遣ハ
メ冊命ヲ加フ是ヲ善德王ト為ス元ヲ仁平ト改
ム並ニ「曼」子ヲ賜フ德曼カ曰ク此ノ花絶艶ナレ
其ノ子ヲ種ニケルニ果メ其ノ言ノ如ク
百濟ノ王臣僚ヲ率井テ常ニ泗泚ノ河北浦ニ遊
フ時人因テ大王浦ト称ス又王興寺ヲ創建シ華

閣、高臺、水ニ臨ンテ壯麗ヲ極メタリ毎ニ親ラ詣
メ香ヲ行フ

新羅ニ烈女アリ薛氏ト云フ父陽秋衰老ノ
堪ヘス薛自ラ婦人ニメ父ニ代ハルヲ能ハザリ
ケレハ居ル常ニ快マトメ鬱ヲ懷ケリ時ニ嘉實
トイフ人アリ薛ノ父ニ代ランヲ請フ薛之ノ
許ルシ鏡ヲ破テ信ト為シ其ノ戍ヨリ還ルヲ待
チ與ニ夫婦ノ禮ヲ成サント然ルニ乱世ニメ代
者至ラザリケレハ嘉實戍ヲナスヲ六年ナレ
未タ還ラス父改メテ他ニ嫁セントセシニ薛從

ハス將サニ逃レントスルニ嘉實適マ到ル因テ
破鏡ヲ以テ互ヒニ驗シ遂ニ夫婦トナレリ

高句麗、日ニ光ナキヲ三日ナリ

百濟王璋薨ス在位四十二年謚メ武ト曰フ太子
義慈嗣テ立ツ太子夙トニ孝友ノ聞ヘアリ時ニ
東海曾子ト号ス

高句麗復タ東部ノ大人蓋蘇文ヲメ長城ヲ築ク
ノ役ヲ監セシム東北ハ扶餘城ヨリシ東南ハ海
ニ至テ窮ル長サ凡ソ千有餘里是ニ至テ十六年
ニメ初テ功ヲ竣ヘタリ

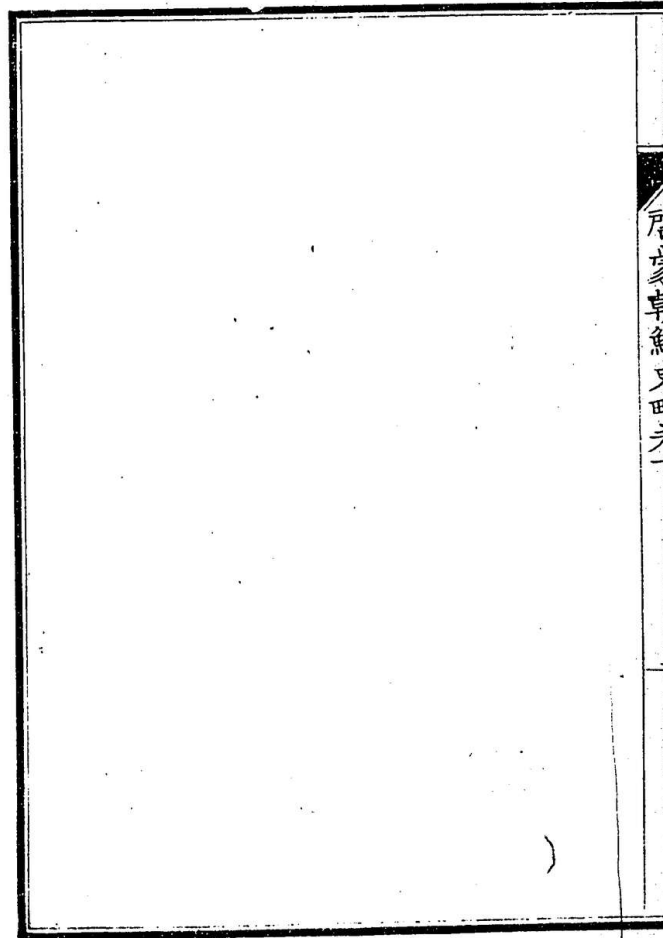
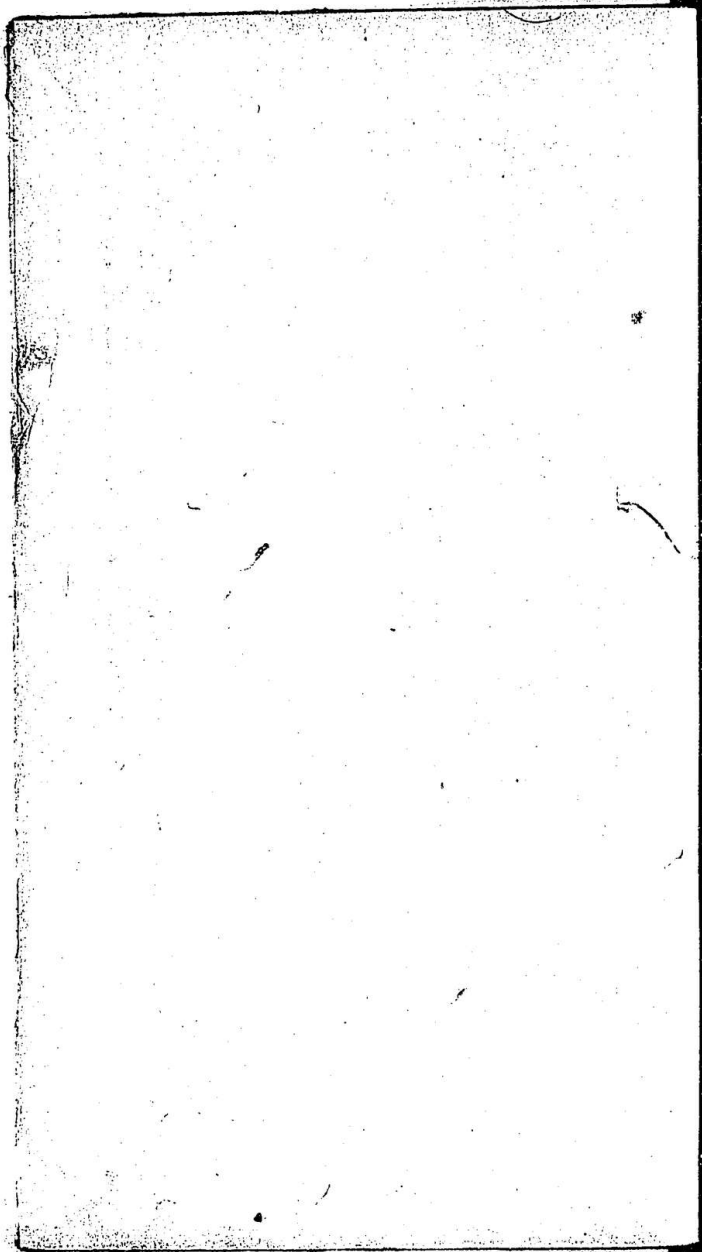
高句麗ノ太子桓權唐ニ朝ス帝郎中陳大德ヲ遣
ハメコレニ報ス大德高句麗ニ至リ山水ヲ觀ル
ニ託メ游歴殆ント遍ク悉ク山川道里ノ險易ヲ
察シ還ルニ及ンテ備サニ高句麗ノ虛實ヲ陳ス
帝是ニ於テ始テ東征ノ志アリ

百濟既ニ新羅國ノ西獮猴等ノ四十城ヲ陷レ又
高句麗ト謀テ党項城ヲ取り唐ニ朝スルノ路ヲ
絶ントス新羅王急テ唐ニ告ク百濟ノ將軍允忠
新羅ノ大耶城即チ今ノ陝州ナリヲ陷井ル都督金品釋妻
子ヲ殺メ自ラ刎子タリ懂下舍知竹竹城門ヲ閉

テ固ク守リシニ舍知龍石竹竹ニ降テ以テ後效
ヲ圖ルヲ勸ム竹竹カ曰ク吾カ父我ニ名クルニ
竹々ヲ以テスル所以ハ歲寒シト雖モ凋マズ折
レス屈セサラント欲スルナリ吾レ豈ニ死ヲ
畏レテ敵ニ降ランヤ遂ニ力戰シテ城陷ル龍
石ト同ク死ス新羅王大ニ懼レ伊餐金春秋ヲ遣
ハメ援ヲ高句麗ニ請フ品釋ノ妻ハ乃チ春秋ノ
女ナリ故ヲ以テ憤然トイ百濟ヲ滅スノ志アリ
金度信ト指ヲ嚙テ歸期ヲ誓ヘリ春秋麗國ニ至
リ援ヲ請ヒシニ麗王ノ曰ク麻峴竹嶺ハ本ト我

草	善	雖	肝	コ	タ	後	里	島	之	一	ス	布	抗	カ
莽	上	カ	モ	フ	レ	リ	ニ	ニ	安	ヲ	ニ	ヲ	言	國
ノ	ル	ラ	尚	取	ヲ	サ	メ	メ	居	辨	龜	以	メ	ノ
中	ニ	ス	オ	ラ	洗	キ	能	乃	ノ	セ	ノ	テ	對	版
ニ	鬼	ヤ	活	ハ	ヒ	ニ	ク	チ	樂	シ	一	寵	ヘ	圖
入	脱	龜	ル	汝	暫	少	五	其	ヲ	ト	龜	臣	ケ	ナ
ル	ケ	コ	ヲ	カ	ク	シ	臟	ノ	言	遂	ア	先	レ	リ
テ	レ	ヲ	求	岩	ク	ヲ	故	フ	ニ	リ	以	道	ハ	地
ヲ	得	ル	石	心	出	ヲ	因	陸	龍	セ	リ	解	王	モ
信	レ	ル	煩	シ	言	テ	ニ	王	登	ニ	俗	ニ	怒	シ
シ	ハ	所	上	ヲ	洗	フ	鬼	登	リ	語	甚	路	テ	還
乃	豈	ヲ	ニ	覺	ツ	鬼	ヲ	負	テ	日	キ	ニ	之	ラ
ナ	ニ	得	置	ヘ	テ	ノ	負	日	ヒ	ヲ	東	道	囚	兵
歸	兩	ケ	ケ	復	タ	タ	峴	見	ク	片	海	解	フ	ヲ
ツ	ッ	吾	リ	ヒ	タ	納	吾	フ	テ	吾	カ	春	秋	出
テ	ナ	レ	汝	ハ	納	ル	ハ	行	盛	カ	肝	秋	乃	サ
纔	カ	肝	若	肝	ヲ	神	ク	ン	カ	ヲ	龍	乃	ナ	ン
カ	ラ	ナ	シ	ヲ	ヲ	出	ヲ	明	ノ	三	海	女	春	秋
ニ	相	シ	歸	出	ヲ	得	ノ	得	ノ	三	海	女	春	秋
岸	ヒ	ト	テ	メ	得	ノ	得	ノ	三	海	女	女	春	秋

啓蒙朝鮮史略前編卷之一終



歷代通鑑輯覽卷一

